雜兵物語

坤

番外書冊

和書門 類
一七三四 號
一七九 函
六 架
二 冊

内閣文庫
和書 類
一七三四四 號
二 冊
九 架
六九 函

武備兵法

新刊紙本

内閣文庫
番號 和 17344
冊數 2 (2)
函號 189 244

国立公文書館
National Archives of Japan

雑兵物語下

矢箱持　矢蔵

昨日まてハ弐人して壱荷に矢百筋入て持れたが今朝のハ弐百の小箱を合せて片荷にして小荷駄がはなれぬ事を背負て馬ハ肩へせおふ矢箱かあくの箱に弐百筋せおつさて今朝のハこれ働きに矢種も定めて持ますあんばいハ又おもひがけし事がある足軽の中に二人もとらしいかならず敵の十町だらずも先へ

日本政府図書
淺草文庫

こゝにてくゝが筬穴の矢さし出の間かとうろゝく
に鉄炮を工合もいまにはしやう殺なん先り
矢をさしく根ふ鋼よつきひ皆かんやまゐゐ
稜に矢一筋を射く構ら満けて敵を壱人を
射ふ手ハなうらぬくいゞくき居ハ事ちちすて矢
弟持しくと遣ゐとしお殺ぬん訓ゐ様ふおとう
ゐ弓を持く捨居いくと取せつきを秋きはしめ
うろ弭紐花清く乗しゝとおもひおましく
折ふし敵ら壱人泉毛をのさし出来る所哉

さぬの穴をぬらしひきゃもしぬ清くこんゐ程ふ
耳れ穴へはんぬ労ひくかりて首を一ッ引さけゐ
今壱人ま臆病の振ひや色あをまくなりて矢
をこれ射捨ゐうる是を後ふ病ろよくぬつくは
法度を思ひ出しして死居るは射べいとゞく一筋の
矢哉こゝゐのけつ抜るめ清写る町ゥ肩はたぬさ
なんいゞく敵ら壱人鮮口の極ふ口をとめはくまる所
をも鋳をさけの肉まゐがゐよ切清け様のさをとだつあに
近射ゐ射ゐ所ぞく口の中かうほんのくびやまず哉

我抜て押付に抜べいと射付た程に主杉のきに
如ほ三つも兵を首抜斗かいぬら究るとかくる
て手柄を為ないら救まいと思はゞ一番の弦
我捨る矢をあげぬこさんざ矢一筋さへ手摘と
きるに是を思へてさへしめつまる程射きりつぬら
こらんさんが惣しふ侍にもあふこんざ
於まつばぬ厩が中間小者をも見ぬ
さげつて初めつらかさぬに差れはつぬまいど
大形よりに中間たら云ようなしつかうまきば

歴々の侍衆も後には我先にと弱らあらおるでくハ
ござらぬ也臆病の花とやら云が此やうの事んべい足
軽衆武人のうちで弭槍が実殺しつと矢で
射殺しまとハ矢の方が手柄を上ぬと思ふ弓
の役ぐ矢一筋も残さぬやうしておけ首を取ろ
ても手柄とはいひまさん持ちハあんとおもふ
又ははいつ荷持ハ矢箱二ッを負ふひとして水
を汲時も入ないとおもはいつくはちろつてさて
其後へくびもぬよ打ちを手柄ざよく沢を勤る

頭(?)の弭(まげ)ハ実に猿(?)ハいよいよわかりました昨日(きのふ)
いちそこゝが薬(や)をもらいんで孫(ふ)根の迄入(ここ)がゆる
く清く気と根腹二つに成(なら)つてまゐ
此世(このせ)脊屓が気ともに孫根より清めまして渡(わた)さるべし
今迄(いままで)の通(とほ)り気損(ちこ)と存ぬつてを足(あし)でも自(お)
形(?)無からなんでござる皆(き)の毒(どく)で有(あつ)たら脊屓さ
まへは思つて様(やう)よ飛(とび)しまいまして焼(?)い此木(きの)山(やま)越
の時より満(ちよく)代気箱持が山をとあがるとみえ　たる
ころから気箱(や)一つ(ぢつ)に武人を入(よう)けて一はい清めるか

薬箱(やこ)の先(さき)のおかはぶきとも上(あが)りかねて支度(?)
よふ居(?)んてゆうましと坂(さか)のうもんでふて落(おち)て気を
ばんまけるが枝に迄(ほど)あつてから拝(おしつき)月人数(ぶんぞ)が気をとふん
居(?)ましさうふ薬(やく)箱(?)し荒(うら)や(?)一本(いつぽん)もなしかうしまち
飛(?)せ脊(せ)中(なか)にいれあたおつくしてあるそのつもりの
ちふハ百(?)匹(?)んもよ上(のぼ)り下(お)てしまいとるそばい

玉箱持　寸頓(きんどん)

此玉箱(このたまばこ)を二人(ふたり)して一里(いつり)をふなすつやが昨日の小
迫合(せりあひ)で箱ほど脊負(せおつ)て汁中(うつ)足(?)便(?)[illegible]鉄砲

もし〳〵音を聞に至まてもやァきともちるやうに
ずん〳〵と音がきこえ遠きと腰付の胴
乱の所にある藥がかゝりて燃ることある早合と拵の
中に有ら〳〵しなし其焔が皆藥が早合に入
底にはたん残る玉の中と先々飛ひて
おろんごに口藥込めひ先に至ちかわと入つてしむ
ぞうにはよろるべいぞの早合に藥はあ底いな
底だ一ちん藥とは先飛ひがちはつて透り
にふかんかん底は又口張紙にがひかに糊うけつ付く

玉の中も紙をとき所の所に其紙ら込まてなんぬ
二たじさ三はじ紙くまる内って筒先二三寸
まそおんの所で來に玉を込んおものぐぞう
きとかきとも内の筒をのこ込ひ所で込
はそもやりてもで込まひの中の紙出んでうち
落さに後く拵は於とはく鉛炮と又糊
乃はつ込ひまもちいそうころ〳〵紙は中
こうけ込と込ひの所の茶ハ早合の底に残るまま
ちはさし是も底門と中の筒さまく込ひ落

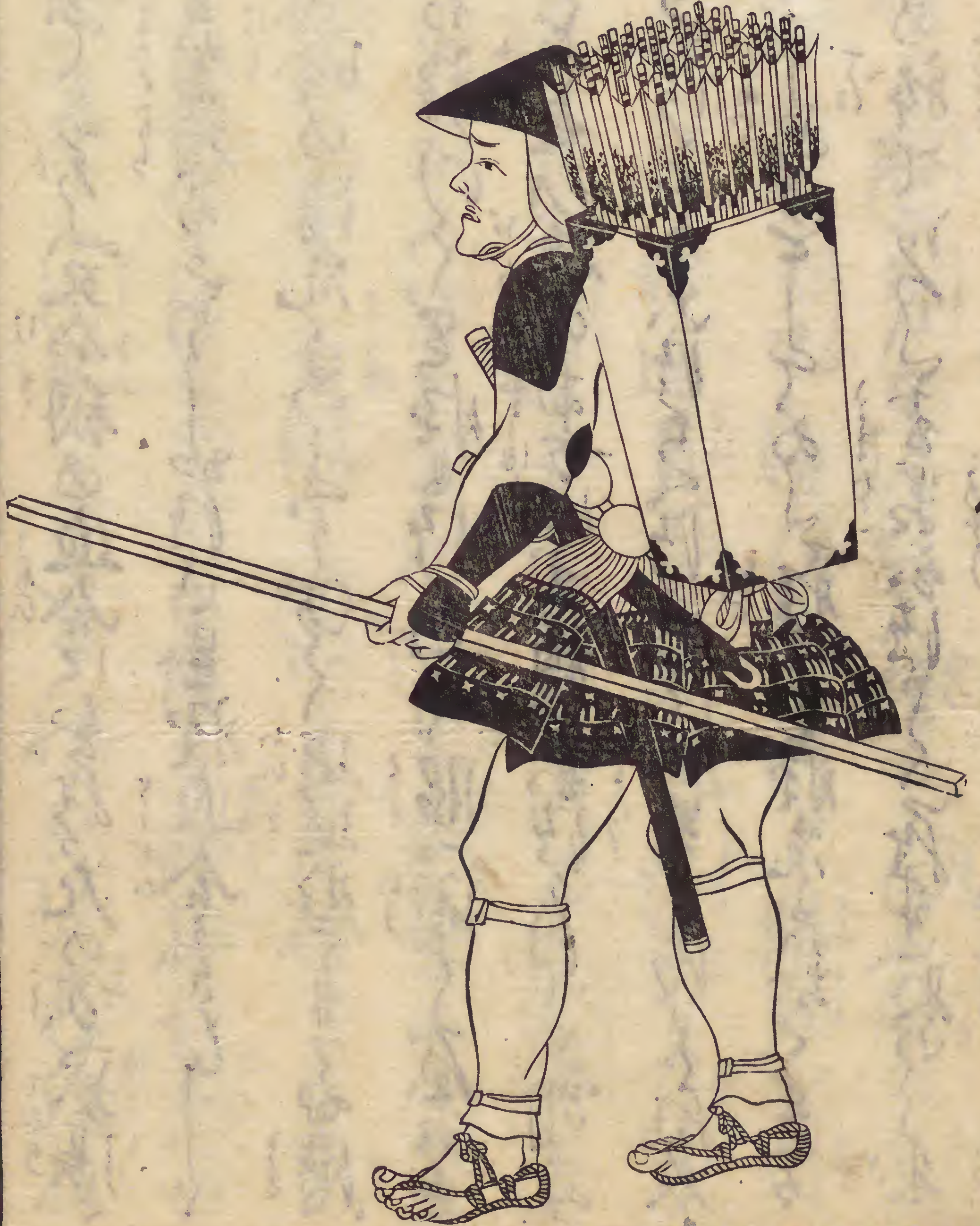
こゝにおゐても矢合(やごう)をかけひけれども不残(のこら)ずさし
いかんともなりがたく敵(てき)も今時(いまとき)せんだくなきゆへ鉄炮
陣中では栄(ゑい)ようもゆるく疲病(つかれやまひ)がちなやからつゞける故
せんだくもいはず鉄炮よりとし一つ画と思ふちつき
ひまばはおかく遠出(だ)するが近からさんざうばよりもん
ならよくたゝかはずと胴乱(どうらん)一ちんと一日分(ぶんとく)にはやりたま
もとくたやひ鉄炮車ハなんぞ早(そや)ひたくのみで
皆(こうか)ちり〴〵捨(すて)ゆく地(ち)じやくもうち鉄炮は敵(てき)に
ふくいは静(しづ)かに射(い)たれどもと御定(おさだめ)のとほりに

かう鉄炮をたんざしつゝんでまづにはりもちやくのうち
いかるほど敵(てき)を一丸(いつぷき)も撃(う)つ殺(ころ)さればこそ草をかゞひふ捨(すて)ゐ
をしいはんためおきまで腰(こし)にはさむがかまへとも差(さし)を皆(こうか)
皮掛(かわかけ)はさかゝう門をがめとかゝる箱(ずく)と背(せ)負(おひ)て気を
も水(こう)荷(まへ)ひふとも鉄炮ごうの洪箱に河(かわ)を入(いれ)べいものが
いわれは捨てんと思ふこそ頭(あたま)うちたのむ訓(ことば)くを文
なすらぬ力(ちから)もおしをひそのはおそしかう果
ほふれたは矢箱(やばこ)の役ふそかひりはおとうくて事ぶる
気はまるしほしいはぬ鉄炮の内ゆゑ一人胴乱(どうらん)の弾薬

業をさせる成ものよけれバ討て出陣(おさづめ)にくるならバと
ひん抜て腰に差(さし)刀(ぬき)ひん抜て向(むかふ)の敵の真(ま)ん
なかを討つかまへる刀(うちかたな)で討てば爪先(つまさき)を切(きん)
て扨ての腹へ付て返す首(くび)を取(とる)と討て御陣(おかうぢん)のお札(さつ)に
引上よとの御下知(おげぢ)なれバ扨て引上よと指図(さしづ)さ
討ぬれバかまへるかまへ御幵(?)で御下知(おけぢ)にて衆(しゆ)ふなにあつてく
首(くび)を捨(すて)るぬなぬさ刀(こぎ)はふんまはせる首ハ捨てまる
残(のこり)おなひまんではまども御陣を鑓(やり)に皿(さら)へい
討ぬ首をたも同前(どうぜん)ぞといふ様(やう)に後(と)此(それ)文(ぶん)に渡(わた)り授(じゆ)

御座るぞ　あるは又合戦(けさ)の迫合(せりあひ)におまへたちの方へ手長(てなが)く
渡(わた)す玉箱(こまだこ)持(もち)めらせてしかたゞ足軽迫合(せりあひ)がきびしく
なつて跡の侍(ひと)衆をまつて居て進退(かひこゝ)ならざるまで有時(とき)
玉箱(こ)持(もち)ハ足軽に付て腰(こし)へ用(よう)て居のどと
いかまへど長柄(おゝ)持の方(ほう)に玉箱をおいて一人(ひとり)づゝ討るゝ
あはちへゆうり出してちへ行て一足もひかぬよだれ
でかくひごろよりとして手柄(わど)は足軽衆よりおくまる
ものゝ鉢(てい)で玉箱(こまたこ)をはなれて来(き)
さら御味方(みかた)おまへ共此(この)様(やう)ならぬ時も脊中に引

さきを行く居(ゐる)様(よう)にいつの鑓(やり)が見えには合(あい)図也



荷宰料(かざいれう)　八木五蔵

がひつ大人数(おほぜい)が十日餘(とつあま)りも押(おし)ならば押(おし)て行(ゆく)
されば跡(あと)路も十日路(ぢ)も續(つゞ)く道は稼(かせぎ)に指(さし)てあるが
調(とゝの)ふ小荷駄(こにだ)がでゝくる迄(まで)は先(さき)へ追付(おつつき)難(がた)き
物なれば其時の人数(にんず)を写(うつ)し日の扶持方(ふちかた)を細首(ほそくび)に結(ゆひ)つけ
荷物をも調(とゝの)へ二日や三日だけは馬に押付(おつつけ)持(もた)せべい
も事(こと)まことのけちんが敵地(てきち)でも又は味方地(みかたち)でも二日
過(すぎ)れば又それもんざいけやられ時は飯米(はんまい)に詰(つま)る
味(み)方でもだいもさんざい鼻毛(はなげ)をのばさいでんぬけと

満(みち)てある時に小荷駄(こにだ)が遅(おそ)いとて鞍尻(かうしや)に結(ゆひ)たる
持(もつ)の荷縄(になは)やさん俵(だはら)を捨(すて)ずにおいて心(こゝろ)かけ
いものく茎(くき)を荷縄(になは)に練(ねり)て味噌(みそ)で煮(に)て
荷(に)をからげて戦(いくさ)に其縄(そのなは)をも喰(くう)がさん俵(だはら)は
水(みづ)に入(いれ)てさては汁(しる)の実(み)にもなるぞ
馬のかいばにもなるぞ敵地(てきち)へ踏(ふみ)
込(こみ)てあんでも国(くに)へは帰(かへ)らぬ
ひろひろ陣中(ぢんちう)にさんざんと思(おもふ)
ながく草木(くさき)の實(み)をもつてよくよく

朽だよりなる迄も馬にハ飼ろ松の皮をよく晒
しておかゆにしてくれろ亦大雨抔で
川水が出ても細首の瓶が立ぬほどならば前に
もつた時ハ根葛ともに葛を喰せてつなぎこせ是ハ
それば新を一日に壱人にあたりて八拾の木がハづへい
なるハ夫人数が集中の時ハさへと有もんだと云よし
まくさでもなき所でハなるハ馬の糞の干たるを
そもつけんで新に申さいぞ亦家内にハ米や
衣類を埋るをもんが抜して埋に時も鍋や釜を

おろんじ上にちとつまいかでいでちくちの上に霜の
降た野らさハ朝と梅干の所ハ必それ消るものさぞ
掛てそも日数ふかそてハそえ成ハ色んどと云能く喰せ
附谷の端がたを敵地の井戸の水を必ずのまぬもん
をいぬ底にそおいらぬ毒をまぜ入るものぞ
あるぞハいぞ川も流とのむへい我か丈を国へ入ハ
水がある時もんじ陣中へハあん仁を持て行き
つけりん鍋に入て其上水をのみに
本国の田にしを陰干にして鍋に入其上に蓋を

のんどもどんもんぐる

夫丸　馬蔵

馬蔵とのゝいはしやるなさるゝ通り陣中ハまだ迷
もないさんでござるやしといひなさる事尤な
こんだ歴々のお侍衆を初め小者などもまで具足
はきるをきき大小をさしもちくゝ指たる者ハいかめしく
こえなれども陣中でハ夫丸の事ハ骨のおれぬ事ちめ
脇ハ声もなきまゝ在郷のうおば人へ世話をかけしと
毎日くらやすくてこびやに衣もやさき帷子一枚

参る在郷の袷紙子ちへて雨の降時ハあきを
借とうなどいふ者の真中に穴をあけ紙の袷だを細
首に掛て大破き笠を紙に被り二日路や三日路を
夜昼ともなくいやおもしにはきになれる馬のさきに
小物ちたちの扮なりつゞく袋に糠とちゝくろお入尻繋に
引月漸水汁の手をやにお歴々のお侍衆やおなにか
あなんどは武道をはいかめしく貴様おに居ても暑い
寒さいつもひくる時も雨む時もかういふ持夜
たまき程中しては

ぶりの子持をも手練にさせられず一ツで此座り次
一ゐ荒しいふ者も云いつたが様にさうおもうて
布子は常々しくるまよう濱の巻ゐまくらず
あたりひろき時の陣屋の中へ這入てみるがよし
城とのし出口とぞ中に山や川や野合戦の
地にし出汁は陣所はさきのめくをもし敵の城を
乗取る時も籠城にも見へさせるべし但弓鉄砲
すと是は知りし人ば小座ずども見えあるべし
侍さへ此様に申すもの今は此頃は百姓

老しゆが物語をきかれたが祖父はむかし馬出しと申出たる時はじめし
すた籠城の時は兵粮をはじめとして其外の道具
類又武具などに及ぶまで見ぬ事はない石材木等迄
も勝手に云様ば一ツ二ツは必ず持べき事も第一に水の
手が肝要だといふたる手前めさせ山城に籠り
やうな所は横にあくる水に詰まって既にのどがかは
いて死る事もある程と云やすが水が
大切なる事だ前にも云た様に一日に壱人に水壱升の積
りだぞさて又米は壱人に六合塩は拾人に壱合

味噌(みそ)も十人に弐合とやら夜食銭(やしよくせん)なとが有(ある)屋(や)は
此も益(ます)が増(まし)すれども大さはべい益も一度(いちど)に渡(わた)さば
上戸(じやうご)の中は酒(さけ)に造(つく)りてくらひ中その日の稼ぎに三百四百
のもくろ一度(いちど)に渡(わた)しあす日よりの日数(ひかず)おくらるゝも飯米(はんまい)渡(わた)
さるゝハ拂(はらひ)ものでも元気(げんき)壮(さう)の有ものでも中々座(ざ)る
いふ也も古法(こはう)ゐ分の程りの訓で々お心得(こゝろえ)ものなりや
屋は扨(さて)とらんじて御耳に入(い)まする程どの事
あんと思(おも)ひなさる
馬蔵(むまざう)云通(いふとほ)り飯米(はんまい)なれば此銭十日とも一度(いちど)に

渡(わた)すべいならハ上戸(じやうご)めも八日九日の飯米(はんまい)を酒(さけ)に
造(つく)りてのむ屋(や)ハさある屋ハなるバかつ川みな
死(し)屋(や)ハ三日四日は飯米(はんまい)を酒(さけ)に造(つく)りて
のむでも二日三日ぶんじきしてもつくべい
所(しよ)あは渡(わた)まつると云(いふ)こんやうなことみる也
翔後(ことの)の御代官(おんだいくわん)ハ関東(くわんとう)から西国(さいこく)へつ三ヵ八(まうりやう)
人数(にんず)がもんまひりつき具足(ぐそく)早(はや)ともち
うつろく飯米(はんまい)銭(ぜに)を買(かう)てもちて具(ぐ)
足(そく)とも先(さき)なひろく先(さき)がけとしる具足(ぐそく)を着(き)そ

こゝもとに篠(しの)がはえ申たれバ武辺(ぶへん)にハならなけれバ
所(ところ)でとつくり陣中(ぢんちう)にさすかぶりてある物ハ
敵(てき)にハ清為死(しに)ぬれバものぞむ所だ敵(てき)をも
なハれ以事飯米(はんまい)にいつゝ満ち候かはえしぬ
食ハ何どにきもかつてあのうちくもだしにと
同(おな)じうんどうむ候ハ

鑓浅からんで新参大勢の鑓がさ孫あたりに
旅を漬りてひとつとしてあまりになりて
あまつさへ旦那も弐番鑓を新参加助が旦那の
一番鑓をつきつけてあきらかになりて加助が鑓脇をおつ
はさみて[illegible]けれがさそうらへども被官も
比類なきてがらとはさつて史にはりはなれてかまへて
旦那ぞんじてハいましかるに一番鑓といふ事ハあらひ
どつかと弐番鑓を入るとひとしく三番目から
其趣の鑓を一度に越しこみ新参鑓脇をとかくして

若黨　　左助

加助どのハ指物能たゝせてさしてあるきやれの
侍衆ハみな其上の者ハ鑓脇を引請首をとつてきたる故
我等も旦那の被官にて手柄をして此布の名も
お主の旦那が手柄をのへられて候ハ附勢の為になるから
はてかつけや尾にて思ひ出してきさいかけめが
あれハ旦那にて二番鑓を合せ出しておいてかつて
被官も鑓脇侍ぢやとよむ〳〵刀を鑓脇殿
はや見なされてハ三番目からハ敵も味方も一度に

扨又やりかつぐが鑓脇の事ハ、おほくおまへがた
その時大将に付てさき迄て下散の糸がちうち
ぎれて此度ハ此つめ是おもへバ武具の黒
いとは兄事をおもふとそのうへに黒糸や黒漆抔ハ武
具にてよく此はかんざしおまへがた此具足の糸が
切れぬ時の為にとちぎれくさり持てまゐる此革の代
下散とはくさるく扨ハおれちいがひに手負をとる
しなんとで弱ひ者がひとあはすと気をとると
こえて常々息災の時より赤さらげ武士とかう

しぐくまつはくらからぬ血がたくさんとをしたばかり
今まで六の扨うにはまく此つらし吏立の手拭を
して誰も臆病者がおとしてまゐらひにとくと気後
引そばからおまへがたさせる袋に毛をそへたしが
首矢の根を取く扨ハいとおもつて入ル事来さ些
ばくと気を失ひめ語おおみぢちはく外科
ともも心ねらさまきこも此具足ハ鼻耶が付負ひさ
はらめ詞で柿漆の手袋とはしめしおまへも手
負さんへ扨ハ此らは血吸袋とおもへ来た是非

なれこそが仕合とハ此顔なれ

草履取　加助

此鉄炮を道中笠袋と云てかゝげる合戦
さしもの多く雲形が気てもしく屋の敵を追詰
まさらば腰にさしたるさめといひなきのながやくに
立時も出なきに此方用にたつる時を鑓と
此清之おまてて頭をなきさつ終に関
事もなひ刀にさ次兄刀の役にたつ
きるなひで棒よおとしぬ所迷惑しぬ所に

此鉄炮にてたゝし敵を一処さ鉢を打破つて先てき
中ひてしめてやいなや鉄炮は勝
負がたしするを節分は大豆を打んまくところに
玉さはうめいてくふと思ひて又弓の勝負が初ま
清く箸を投お汲がめし玉と矢の打とんでくる
を見ちは此いなずまをもれ玉を投ぐ汲ぐめ
至しお清のめぬ所ち同めが云なきつては
其の鉄炮を腰にさしてさしめ一番鑓を合せべいと
云なきうち訓ある左ハいくさのうちやも此鉄炮で

鉄腕と返詞ヤ屋ハ玉薬一放ぐ下されいと
のべられけれバ鉄の王が鉄腕椎気ならバけしからぬと
て目玉をさして志かなれバ水流く
是非なく見物して待まいらせい一番に鉄
かつちと合せてあの真敵を突殺し首を
取らばお主の志かや屋ハと思ふ所が
いやし旦那が敵ハ十人や廿十人とも有る
程な人ぐらバとおもひしまぎらかせいなさひで
萬一旦那ハ討れなバ有屋ハ我は其

屋だと此鉄炮でならバ屋ハとおもひしかるべし
ぬ如く目付し婚ちひく待まいる居るもまじハ敵
が在延旦那をお屋ハとそろやうらめん様がうんざ
でうなき身の男が刀を接く来る所でも待らひ
ちきよして此鉄炮を門ゑお身の肝ハ仕合と
うやうらん様へ先の目當をうつさんで見磨ぶ
み屋しらめん様が成佛した所ゑお稜の様乃
屋ぬもうハさうつく取さまじハ旦那がハひねさ
ふくは首ゑ第鼻をそつくと味方討ぶ油ぎまじハべ

所とても法度なれども多勢のこみあひたる所で
鼻をかけといひながらも首をとらないで前ハ
でこしんしやくなあけてやうなたん柎
一ツかんをひきまはしバかひは面白いきがしてゐ
所にハやしり首を持てハ重しでやつたん柎へ
なくてもいゝやうなひ追持でもあらハ馬に付けも
桧緒も取屋にしてをかれと分別して鼻をとり
こうさいなるべきの大事れもとくゝ胸板の内へ入
置いて来てまいれバ具足と先ひとえので懐へ入て

大切なものと落しやすいといふ事をもつて思案をめぐら
して鉄炮鞘の小尻へ入其の上へ鉄炮をはさん
で所でかけふしたまへしたが、かこひなる細腹が
いたんでいまにつゝいて弾ハ玉が一ツ胴腹へ当つて
後へはんぬけたる所なる気味がよいとおもつて
尻の跡とはいへさまハこゝらやうなん柎をとうは
つぬいしむくひばけてさながら脇へ矢が
一筋とほりける所なるあん思ひは扨バ矢ハぬん
ぬきだかまても根の先がひはつてんで抜けないで

角が一本ありて一角仙人のやうだとて皆笑
いしつた又旦那が一場で芝居もはやらぬやく
武度の高名をわすれさしやるなおれもちは
うわ心だら好をこそせうといふて鉄炮の鞘を
小尻のはう能はがして鼻をはんぜいにして鼻を
かくと云ても唇をうけて云つくしもんだに
ちがいわかいとて上髭が有なれば女でないび
やし男の首ではなきぞ能男の首の下にはあら
なんとて其時を鰒の目にも眼が涌いかくしちや

あさらしの所へ持ちの手柄は役に立あれとお
もはくげつて捨ゐてもつけてきたあ味噌にし
てあれはれ骨を折て首をとりて捨ゐもとし
いさんで肩さへ重あれなれば、はやうそん
樹れ乱捨おれもさんそへい世鉄炮をも請て布
施あかして首の供養をもせぬはいぬのとあく
のうおおひたんで旦那の鑓かつぎ、八を
えあはれまる鉄炮を渡しなさはして鑓を
とりあさんもぬがやりかたぎ、八がろうちへはんぬけ

こらかれくまことに忝なかつた茶屋早く急い時分さ雑
兵今太屋は足軽腰ぬけでまたないが其矢を
抜くば未だりしに思もとがつと当いしは血目まで
嗜ちらふ座ん残抹まさらさしもちとその末へちら付
丹うちらこんぬけ矢根を手にて取てぬらつ
ぬいもの也毛さてはしる釘抜あん色いぬ
座そ持て此ら抜ぬがよれもんぞ

丈丸　　　　弥助

加助とのハこゝにて手柄を志れさせぬる氣を失
清めうくろくに居させんぐその樹深のあとを川
さんざくおくが上うち見まがせるのぞ羽織を結
羽ひぶゑ布子の裳ハ袖つくまで帯に引
ちきんで羽織れ玄似せして来る中間の分
又樹深を陣中へ見思もんざといふ事を
志うりがとうやまゑ暦々の死ぐめに樹深の
長く手拭や手足の袋やおんどふ済てせんく

まなきつゞき窓に居ならべ左助とのもはらに
引たぬき袋を検深なる挟のさきをさしかけ
さはなる白布を左助とのがるんなれども見さる足は
自然貝邪が手負なる時背中なる打おつく
足でかゝげべいと思ふて一尋斗服の布を
せよほきにして其ころそれ古法と志りながら
法なお奇とくれおんざ思いお心かけざる鉄炮
の足軽や長柄持なる中間の具足の
上帯ゆるしく其さるをもその事めときしかし女

剛て手負が首をくゝる時まで具足の上帯をとかざれ
ゝおひりしは法ちをきせおつく其外私
手拭をひつ解てうちおひみにんなきを皆一同
の上帯とゝなるざ長手拭を上帯に志めひ
とせ鞄や胴丸持胴の緒なる具足をつるを
しはちむすき八胴中はよくひつうけかふべい
ものゞ又推参ては小座まで手負の退お
も許しなり二分ざる所いもんざと扱ふる
敵合ちゝく鉄炮おろし其後時は退つ

雖いとも前にむかつてはたんさのかしらだを楯とし
しるしもりん庵い若ゆゑ鉄炮のあたるべいとき
たんさのかしらだに中りて楯ふとも手負には
矢も玉もたつてやまぬ所へ遠く退かさい
時にてまへうりかつてくれい中てあらうやまぬ所へ付
まだ脊骨のも能ざまだべいとそんじや又たけ
とのざきれまらし具足をば下さん日数がさぞ
かひつちぎりきてくろ系がよとをよりた越
はゑ武具にはくろ糸が見事じとて何迄もさき

所さるがぬやかおきて格別漆ものくろひものを武
具にはよくれいそのうちでもかが塗るかのみよ
あくるとひてとくのきもうされてまるで付あう外
料の薬箱持して金瘡の事をちくと耳
乃聞りおいてきさんにも知りまする様におかつて
ふしをれうひやみんがが風のあてられぬやうに
しるやかうちに膿又を矢ひのには腰をも切かせん
ものござ知る事をかがひかいはもが知れむる程なにが
痛はれくも男母のまゝ先をやわでべいぞ湯水

の事はいつもおよつて粥(かゆ)をすゝらねばならぬものだ飯(めし)
とやらはくはれぬものだといふ又病(やまひ)がひと
つはやる時はおのれが小便(せうべん)をのむがよいぞ
やたら薬ぎやう時は胴乱(どうらん)でも重くて小便をこ
らへて居ると病なかなか起(おき)らぬ也をこやして居(おひ)
る後(のち)に血がめくれあがつてかひうはさ所(ところ)にや
たらぐものだ

夫丸　茂助

今朝(けさ)よりのかけ荒(かし)まぐさかひふ膳(ぜん)がはそつさ

ちそうの塩梅(らう)へ居い前(まへ)よりはやくうち胴(どう)の
ひきわつけたるをつときいまぬさせい是(これ)ハ布袋(ぬのぶくろ)
ともに入たるだが此ハ二日や三日みな陣(ぢん)ぢん居れ
ねばならんじたをよきを居い五日七日の事なれ
らそなかの茶(ちや)でもかむ居れが幾日(いつか)もきまかすれ
陣中(ぢんちう)ましく粥(かゆ)を足軽(あしがる)以下(いか)までをあまりにいふ
ぢめひきみ孫まの膳(ぜん)まつの持もんじもんけれ
やハつさく食(めし)はそまつくん居いでおまへまづせん
非もそ面々(めんめん)ともなんとてぞ陣立(ぢんだて)の急(きう)にかけつけ

ゆるこしく疵は目数がなくて常にはなれさ
ずしお敵のいと疵を切てくゝ手拭か絹布で包て結
て手にいつ付て巻てされは塵をも振捨べい
加助とのしゝ手負て目まいがいくるとて疵をへい
とうに水や湯をのまするはいものじや先気を能おち
付させて、いまの血が落て武辺者が成てさて気をも
つけて所がひろく胴腹の病が血がもつる又
血が胴へ落ふもんださうして毛馬の糞を水
かいてくれくれぞ胴へおちて血が下つてく病も

さやくはゆるものでござあし毛馬の血とのんでも
胴へ落さ血がくだす事ほとはまぞ去れば馬の
血ますらう然のよふにこうて枝まれくだくとくう
彼さが申し馬此事をおりはへ陣中へあし
毛馬と門屋の子さびまがた口が病かう血の
もしふもござあまば其ためにも樹深
まよくものとひとつけし樹深をがひふ血での
たしる所ぐ金瘡ぐしそとぐぬちじや
深物がちらいてと若智の又めしとまき

ひとめくらませまゐらすれば此中敵地
でおちつくべき所ハ荊田の根をふくめるべし
奇馬りしたる面を便ハ味方地とおもひたらば
未年此田作ぶちぐの便ハ狂ひかなり次
くほりなんものかとぞ敵地をしいへる也
しごくひおちぐ後便ハ捨

鑓脇 小六

今日の合戦に鑓の勝負がちつともなく味方
の侍の内に家来が敵と追つくつて取付
因果はたがひに見合居たれば鑓を持つて
鼻毛ぬきのばかりで己がたしにたんで出たれば
にかにもおたれてつ持てつて大将いと
あぐども兵なんの鑓極めに追ひさく
まりとつて五六町思ひ出しておいて
きよく返して今家へ孫まいな宮でかけ

るがどおも御座つた結句先へ陣がて小六了
ゆまで刀はあんとして長羽織を着て他家
物の先へ立侍衆の刀がぬかれたる不残長
羽織の裾をしてそちくれてそれ鞘が
ないで今朝も着てゐたる附さんので絞
座した兵の棺成ませけりさうちうち
出しあんとも氣の毒をなんぞ新六あんとし
るがよかん座ではまだ法度がけるべいぞ
今日の合戦は追首とを取まいと男が

討死(うちじに)せんならそこで死人(しにん)の刀(かたな)を持(もち)ておぬべい
其のさやをとりて川へ後家(ごけ)入して持たせあろ
そうして這ひ出て又雑兵(ぞうへん)の備の人数(にんず)でみと見えて
お侍(さむらひ)が一騎おまへでぬかにうちぬく討死相備(あひぞなへ)は
ござらけれ共道はいとしきそれを相下に定(さだ)め下(くだ)
ど一騎付(つけ)ぬそうで取(と)がらもそこ立つ程まで力さずかな
らずされ待がまんだろのこ刀へおか(ちか)よそぶめ
色(いろ)とも相(あひ)をもるしが取って相言葉(あひことば)と段め(あく)き
ばよいのつがうそふえて相言葉(あひことば)城うち言(ことば)まで

所(ところ)であるちれ備(そなへ)ぐらもおし川へつきたこちらの備(そなへ)で
もいまだ内々川へ敵(てき)が出されて旅するやうに
ござる細首(ほそくび)うちおとさせ見れぬがあの男(をとこ)をおさへ掛(か)けに
あらんやと死して又も首(くび)みな背骨(せぼね)よも尻(しり)
みなおすてあるべく首をそれば相備(あひそなひ)つよせさうるべいら
今やく下(しも)とつ付(つけ)ても其(その)あそきしもそう清
きれるおる者ぞ切しそ知し合言葉(あひことば)とそう
ちうらそう差すおもひの外(ほか)味方(みかた)に首(くび)とらるる
討死の備(そなひ)へ沸じるかも有(ある)は法度(はつと)をも

事なん庵いふて又相席をもつて相客が扨
うち立まするは大きれ給へたものお言ひ
などといつても難儀んざいません時は八畳の
されども耳にもひとびひにも穴をあけくまん
とおもへきるしと附かん是ざとおもふくは
あんと思ふこやし此所なれ下を方くにれ
付みなるさくもし落を庵いと思ってもいつれ
いかり見より紋をつけねばいもんをで文字をつけ
又昨日今日の戦場とて流行り鉄炮袋鉢巻を

鐙馬などやくれもしれ出家しの紋を付るさき
までもなくらも拾う笠も被をさてしれくもん
今時当世なやりく節の屏風の出家も紋
と三里に灸や蔵と書くとえる書くそばに
出家しの紋を付ねばならあれ武家をも
むかしをなんとしんで紋があるものは火事
なとが背負いなれば拾ふものは陣まで幕は
おはちだつて背負てもやかん三つの
屏風にははやくねてもいふ人もいくつか

様に脊骨く人の中をやりくりで成て通る
ものいでハちつと続が有たんだ節をば山に付ないで
扨ハ兎角合点がいかぬものより屏風の様な処でも
豚毛も大根でもなく牛蒡でもさいて、ひたいで
書て火事の時はうらちや、めしけふ頃で
かまふなに来ても打かけつゝやけあとへさしてよるは
きぐの時幕をうち、けしてこち陰で来でかんざ
まんべの鶴しく旗馬でもつく不及、思たんおぬ
雑兵追もゑ、汝が付た旨見指物笠で袖で

靱胴乱なども持てハ汝が生捕までも是非ないもん
な付ておいた道具ハ出家の出役がなくなるハ
いまだ仰はせんねひたいへぬ続し

並中間　　新六

小六しめしが咄をよくきけよなたへん清ま
でもまた相下に二ツも四つもならしハつ咄しの
めしく敵よりも合をないて細首をとうしてやつし男が
やうな事ハあるまいぞ、梅に敵を追落しゝぬ
咄をきかれうして聞をべいぞ先敵味方一の先をう

鉄炮の勝負が初まれば弓にもかまはず場中で勝負
場中の高名は一番鑓が一の高名で二番鑓が二の
鑓下崩しぎはの高名くんぞく一の高名と云ふ
つ突まへ細首とおつかいも首を落さしまつて二の
こぼさぬ落さましそ今日大分銭と味方討も紛れ
無いとて首数を持ものは無益な事だ
おらが胸板一もも入ず押まぎれて百八の数珠数ほど
つけたるひらき首へ引かけともものけて
ないとせんとかしまやうて居る西味方惣圍

侍衆馬は能乗つ今日の所で場ゑよしなれ
時分を見合て二の先を横鑓は入物でござあ
後から二勝て二千張強弓を持人もつゝも
刀掛お人も弓を持てもあやまち鉄炮をも持
人もこりまと二千張立一度に敵の方から
馬とより近づ所で敵の方ゟはとげ出
壁いつも有馬は人を立て所もなげは
始てもも出べい所へ押て鑓でも見たいなる
を追退やいおや一の先を残る人数が横鑓よ

鉄炮をとらせ初て一段に出さぬ也、是ハ槍でつ
めくても前でもいつくぞ、又近所されし近代の
合戦にも皆とり立ての責合の時ニ手の勝負
も久しく遠退上方侍衆も東国侍衆もはち
うつく馬ぞ不案内なれけれバ、おくに防ぐ覚なく
なりやさもんぞと思ひ、新六ハ上方衆とて
うなれしらなんもんさ我ともんべい所な
海道を通る時ども三人数ども考へなりいで七八十
挺立の鉄砲なりきらぬ一小だやくら付く

構るを防く、追かけれたおりと槍元槍を一ツ小脇で
押へ合ふ組み下積をいてしに積ずに脇に人数
をもたせもちなぐ、ぬけさに乗込ぎ腹に船つゝ
助さ人数も助んけく、水をくりて乗
くつぞや東国侍衆で丹の乗方を知るべけれ共
よい我死をしる西国衆の有べいなう、ハお槍
取槍を合く行方で行は思案をして行方で防
く是ハ所で船をば乗りかけて、まんなか馬に乗
くも舟の乗物をうりかへ、行に鍛錬の木かう

登旗さしぬくだと見へあみ上方尻をでつくりそゝる所

又馬取　　孫八

今日の責合ハ味方が勝になつたれバさんざいなから
はさぞめで川越がなるべい昨日の大雨で
河の水が増たによつてはだかでめつたに矢先によつても
きやうんどいふ者ハ下緒をよくよくけ膝節をかつ
ちと乗つちめ轡に下縄をつけ障泥をも
持なばいつて捨ていと思ひ跡の四つ緒をかけて
あおひのめ云つ付たものがありいつもやつに
困なりし敷皮を持たる所が数皮になるべい

と云ふ又今時敵地へ行かんとするときは麦穂
あんでいかさんもぎつて入る余
障泥の裏を取て秣を入てさ置くものは
むぎのとげがたんと刺さるもんで否でいや
これを大事なものと思つて尻繋へ
引付てやつてしまつてハならぬ

又馬取　　彦八

孫八さてしかれまでいかなればこそ川端
の河沿をもどつて聞てから持の時がひかぬ

鉄炮をうちしく音の耳にはゞかまてぞ
わめきさけ入なんがあんと越しを忘やう
としぬ此武人の馬丸を水をおしおよ
ぎやし程なく能と称つけんで馬をとゞめ
立およびせやし庵に又武人の内ニある所
やなる時をくのだちとちからしも往やし庵へさあ
殊ばせらびなく水がかゝるとんもんでこそる文
川への流くる物きるやい物やつなかくれまつ
まくに竿に立てかんで取さる殊に此武人を

こゝろ塚とらはらふとおもふにや殊に尾房に立つをと
ぬきとれて馬の立屋に時は添ぬくして
あげくおよう其庵に時をも長持の流まとさすこ
とくつはちは川まゞくなれつく流ものでござる
又此為蒙と鑓持武人を鉄炮玉のごとく水に
うへに流やさぬものどもが殊に此武人にたぬの
尾がひろ下なとうらしさそて見るが曾みさ
見よ此武人の居は立らかつはし庵に兄ろ
だいうなれ太河が川はさ流し瀧に水

はつはしも渡(わた)さねはぬれぬやうにと八少座(こざ)る由

とのへ自然其旦那(だんな)がうんとも申さんといはで

ねんごろにおびんずるのやうにかはゆがると笑(わらひ)つゝ

山椒(さんせう)しむきなきやつめでこそおとがひをぎうつ

くましるといひつゝはやはやくんのくつ云まつ度(ど)しる

さいしよ気(き)に入ぬと見へてやがて川(かは)へかむと

乗(のり)入(いれ)ればさきのさ三の馬(うま)がむかしの鎌倉殿(かまくらどの)

の生喰(いけずき)といふくるまは宇治川(うぢがは)を先陣(せんぢん)したる

丈(そうき)にしもせぬいとかしけ馬(うま)なれども乗(のり)てぞ有(ある)なれ経(きやうなづけ)計

といはうんざめおれは越(う)なされたる訳(わけ)でもあるまいぞの

馬は荒(の)ぎもあるに鈴(すゞ)まで付て余りやさしく

乗付(のりはけ)し旦那(だんな)を鑓(やり)の如(こと)くよいわかる様に乗付

なさるゝ訳(わけ)も若者(ろの わかもの)主従六人真先(まつさき)へ渡(わた)つて付

よりこの瀬(せ)やうかる時分(じぶん)鞍壺(くらつぼ)に乗

うはまなさいよ向(むか)ひの岸(きし)へ乗上(のりあげ)け首(くび)筋(すぢ)

以上そろ元なきまでしかさてそもいらぬ

いらんぞ又是を忘(わす)れね猿(さる)しいひとが云(いふ)

合(あい)図(ず)の手(て)を一町(いつちやう)歩行(あゆみ)艪銭(ろせん)合銭の有(ある)べし以

時は敵を追崩して味方勝て後で
追ちらし次第時も必馬ぐるまにかける事だ
がしひものが兵粮といふものは家中へ此通ひの
さしものも多ひ事だから経る兵物の先き
へ出しと云ものが、いつぶ具足で出しは酒で
やしなぞ見失ひぬやうにし而馬印
もやしはきくの世座に我よくし心に
うけ座ないたんだ廻じく指物を目に立て
てから云たびに名も云ものは手柄のものぞ

いさしい時も其人の名を云まで言ハ不とが前指物やお
しれ名を呼るものだに継名々が知ての味方にし
あらひ子うこ見貝扱子ものの扱かなものがそしろ
いかに人々が知ばとて指を多く了月毛ハ丈い云
ばかりくつてこるいそんぐ所が旗やかくれ扱方ものの上
中百文九近辺知て続く云に見ひあとで下ハ上べハも
んで又川越の時ハ水ヘ一と奴ものゝも有べいも時ハ石灰
とあふく了ゝめ完へ押入べい時は指時の内へ水がかるお
だと云て後もを抱ていくかつて一度に喰せぬハせんぞ

又

彦八とて畜生八あけ六歳の馬がんぜうなるさ
うつ馬がお江戸へ登る事二月めに相別酒句
川の家路の時節の波がひさしき雨にて濡て
水がまして馬の左腰へ水が添ひぬあんとし
まけじと添たえ眼をもして道理じ此馬し
畜町の拂るぞとにより流くて四支の筋とさせ
ら斯き訓み此様などに添ひてあんも渡
アマとの應にと思ひて後生一大事に持つ首丸

ごろ鮒くわるも業のかく河中でたまくかめぐる
とおやつうれ左あに尾が馬までにより流されかり
ゆつきとまきたる流くて且那しにて水をかぶふくひ
かすりきるがはや早く流ぬ海際近く流されさ
訓みし人も畜生をもさんでありくえだちぬ
とした且那ぬは水がらとうく甚く毎年登りて
下役の供太郎とつて門ずり旅切ちたぶる文
て河の水まして且那さるをのかり瞬鐵
も主流きせころしけも恐んで屁れと

まくらもとにちらしておかうぞ乗込なさるゝ時それ〳〵馬にまいらせども
まんでの事ぢやつけぞさて〳〵命をもつ
物さけやうは道馬にとつ付させぬ事を思へ
ぞ腹がへりたらば酒匂川でも飲んで取つ
なんでも其道ゆく川の水が増ても増なくても
はやう道馬にとつ付る時を履つづけ
しつかりとなくしなはで大井川を渡んで越時は
てはまんのござらうしまずに門もとうならん
いぞ孫八しあんとしてくれ是と其馬は兵なん

てはお侍衆の足をも挫かりやるとおつしやる六ツ前もと
大切な馬の筋を切りなくしても道馬に物されて
なる文より尾の筋を延しく尻に山椒を引きさ
むまくなめての事でも挫は能くおもへ
馬と人に替つはめつ事ば居い寄とそんでた
今時のお侍衆をたく飲み其手下で是者をそれ
あの生まれもはりつけん道馬におしやる者は
いつんとおのもつかさてしもりのなれ
なんと又なかしたらん聞馬がやかましいで

で肉桂あまみござるいさゝか三年酒のよふな古酒ぐ
黒焼としぬされ甚だなんでも蚊喰さし汁ぐ
やござるいとく故帳なはたり又馬責る時馬
場へ乳をさし出次時が爪がよふござるとつゝう
まやにつ薄縁の筵を敷つめる場へちん出次
悪じ者喰ものに念を入るが嗜はよふはあん
屋いろ〳〵ともう薬馬になるがさて遊びへあん
べく薬馬の餌にするやうに喰もののおがきる
く用ても筋とさし扶すには畜生の身でくも

嗜ようんへいと思ふあんとふしきおもいつで孫八どの
労たもねさかんあな〳〵おしい〳〵かんでござる挨拶や
おはて〳〵馬夜道はてでござる旅やたらまや立ま
いと思ひにのんとう旅なすまきそらのいはぬ
時のお侍衆をやめるがおもそうさだとおもへばそゝし
ござりやし駄賃也又箱根とくて
つてござります大井川ではいはやの通り長持
とのえが流れござるは酒匂川でさへ倒れて祖母
大井川をはぐれてせもしてもはてん〳〵べん

程ふ色尾張迄ちやつさと一流し小流をかき廻い
能く覚悟としやきと掴く逆為なこんでご
さらぶ是をやせ程な鎖るに江戸女郎となりじや
晨ハとのあんと思ひ恥きる命を捨て掛る程を是と
おもくも知れる末年がかりて鎖馬を拵ある恥さ
きこ惣別一季公法中屋敷と見てはんかぶる思ひ恥
されなるハしふかしか云かどむぬ命を捨る物語よ
その本年のうちにしかも国あきもそて見ぬ付て
もちつくかねむひ存するがいる拵まきで了めが

昔物語しる国せかる耳にて云つたさんで居ふかし
て語つてやうちをつゞけ耳の穴をおつ出ろげぬ
こゝもと昔楠殿も壹万騎の人数をひきいきまで
京をば寅卯の刻ぬおいたちなさる丹波おは津
播磨ニヶ国の境乃三草山の東ぬ小野原と云
處へ辰の亥し子の戌乃刻ぬ揃つ付ニ旅と
同じく坊主が耳を絵じかつぬもやとくてめが
もふしてさう世中たを能耳まえ云ふ陣さんぬ
七八年耳の底ぬ疲しぬ昔をけ揃れ

事があれぬといつぞ今時のお侍衆は、いなもんさ
やせ馬ばおそまやる孫八めんと思ふ是八が所
乃おやし老や所がつてちからんで座る御座
承るく存までもちつくりな存知した事が
此度る時しよりへいお聞やま楠殿か馬の事を
たしかなるが自由に遠路に行ぬ叶ぬ馬ば
おせくさ置門やしがら扶ぞもとさるまいの
是はお手つが見ぬ坊主めが時しくさらせや
はんとおもひぬさる孫八しかしが時しおかし

しながらぞ其様な事ぞに仍て只今時のおはた
衆もぞくながらの柄を抜るる人のはめかんに
岩ぜらなまる馬ばおこみ扶るがちからないんまざ、
さるを思ひやに馬労は人をかいんぐるしてつる
とこるく費用へるぞ新宮め今きくことは馬
労れ本堂み今時のお侍衆もこる労の用をし
て人ばかりかしかぞるまと思ひかなさつては出
急を云ひにぞ其外なるなぞるをそれ馬アとやら
ぬいさくせしをりしいいんでござるや唯人

こんなことこそ有難いことゝおもひなさるな兩
痩馬とお敷き有て殊に武運長久として山
伏が祈祷坊主を頼んで祈念をさせ申さうよりは
いかなる畜生でも痩馬には志をかけ申さうが武運
長久の祈祷だんべい何百疋の馬があつても畜
分よりも上をこのみやすがる訳で大方役にたゝぬ
なんぼさんども是も御代が久敷乱川に満つ
る関ヶ原大坂陣にはん出し着もうし川くる
だん原かられ下もひさしき腰も海老のごとく

腰がまがり川をこすのも済くにはちりぢりぬ頭がふるひなさる
ずうけぬ故ぞ訳をいふ今時の御侍衆を何とも知
らねば一疋馬のやうに見ゆる陣ぶれもなんの
御上洛があんならば来る六月十日の内一疋馬の
瘦馬の川をおのれはなき事でごんべいが痩馬を
皆箱根ぐらい川くぐだろいふ箱根峠で拵まの
うつくしい清ぬ匂ひと鼻の穴へいふふんぐくせずに
古道聡明とおしやる事は爰いらの事だよ
雑兵物語下大尾

弘化三年正月刻成

春日信吉郎

藏版

書賈

浅草茅町二町目

須原屋伊八

国立公文書館
National Archives of Japan